

日本における複数愛者について — 家族・親族研究から —

中島 美央

近年、日本国内では、渋谷区や世田谷区などの都市で同性カップルのパートナーシップ証明書を発行する条例を制定するなど、セクシュアルマイノリティに対する理解や認識が深まりつつある。しかし、セクシュアルマイノリティとは同性愛者や両性愛者に限ったものではない。先行研究では、ゲイやレズビアンなどの「LGBT」の頭文字となっているセクシュアルマイノリティは論文などの数が多いものの、ほとんど研究が進んでおらず論文の本数も少ないセクシュアルマイノリティが存在するのが事実である。

本研究では、日本に住むポリアモリー当事者への半構造化インタビューを通してライフストーリーを聞き取ることで、日本においてポリアモリーを多様化する家族として捉え、過去の家族・親族研究の枠組みと照らし合わせながら、その特徴を明らかにすることを目的とする。また、これまでの親族・家族研究で着目されることが少なかった複数のパートナーシップというものが、日本において多様化する家族形式の中でどのような形で存在するのかも同時に検討する。これらのことを明らかにした上で、ゲイやレズビアンなどのセクシュアルマイノリティに比べて未だに研究が進んでいないポリアモリーに関する研究やポリアモリーの認知・理解が広がる一助になることを期待している。本研究の調査対象者は自らをポリアモリーと自認する 11 名と、その周辺人物 3 名、合計 14 名であり、調査期間は 2018 年 3 月から 2018 年 11 月である。

本研究において、個人それぞれのインタビューを通して得られた知見には、ポリアモリーは友人と恋人の境界にグラデーションがある、自分で選んだ関係性を築く、性と生殖と愛情を三位一体としていない、他者への依存がモノアモリーと比べると少ないなど、多くのことが挙げられる。また、複数のパートナーシップが、日本において多様化する家族の中でどのような形で存在するのかという点については、調査協力者達から得られた語りからポリアモリー当事者達の実体を捉えることが出来た。

以上のことから、日本におけるポリアモリーの特徴などが明らかになった。そのことを踏まえた上で、今後ポリアモリーが日本においてどのように生きていくのか、周囲はどのように受け入れるのか。ポリアモリーが形として存在している以上、その存在が私達や社会に対して、どのように恋愛観や結婚観、家族観などを変化させていく契機となるのかを再考せねばならず、本研究がその一助となることを期待する。

(指導教員 照山絢子)